慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アモーダル完結についての実験現象学的検討 : 因果関係の知覚を通じて
Sub Title	
Author	桐谷, 佳恵(Kiritani, Yoshie)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1998
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.48 (1998.) ,p.39- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000048-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ビューによる資料蒐集を試みるなど，研究手法の適切さに示された筆者の見識と研究能力は高く評価することができる。加えて，モンテッソーリ法の理論的研究と現行韓国幼稚園教育政策との比較検討は，現場での実践に多くの指針を提供するものとすることができる。

また，モンテッソーリ教育法の導入から定着へ向けての韓国幼児教育界の今後の課題に，一方で教育理論としての普遍性の要求と，他方で韓国の置かれた歴史的・文化的状況という個別性との間に起こる葛藤に着目しつつこれを行おうとする筆者の提言姿勢には，批判的スタンスと現実的バランス感覚の見られる研究者の姿勢として評価することができる。

ただし，実践への提言は，研究というレベルを超えた特定価値の提示であり，研究上の価値について評価が分かれる問題も含まれる。この点での自覚が必要であろう。また，筆者の韓国幼児教育界への提言は，そのまま筆者の今後の研究課題・実践課題でもある。これらは，今後の精進の待たれる問題である。

審査結果の報告

今後に期待される多くの課題はあるが，本論文は，韓国幼児教育の歴史的・理論的研究として独自の寄与を持つものであり，実践上の示唆にも富んでいる。また，韓国へのモンテッソーリ教育法導入時期の特定研究に見られる独自の研究方法の工夫に例示されるように，自立の研究者としての力量や見識も十分に認められる。以上により，本論文が博士（教育学）の学位を受けるにふさわしいものであると判断する。

心理学博士（平成11年2月22日）

甲　第1696号　桐谷　佳惠

アモーダル完結についての実験現象学的検討
——因果関係の知覚を通じて——

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学名誉教授・
（元大学院社会学研究科委員）
文学博士　古崎　敬

副査　慶應義塾大学文学部教授・
大学院社会学研究科委員
文学博士　小谷津孝明

副査　慶應義塾大学商学部教授
文学博士　狩野　千鶴

副査　千葉大学工学部教授・
自然科学研究科教授
文学修士　野口　薫

内容の要旨

本論文では，運動構造のアモーダル完結を通じて，知覚世界の実験現象学的検討を試みた。まず，第Ⅰ章では，アモーダル完結や因果知覚と称される知覚現象についての従来の研究を紹介すると共に，G. Kanizsa や A. Michotte という非ドイツ語圏の実験現象学者の研究哲学を振り返り，本研究の意義を明かにした。第Ⅱ章では，続く本実験で操作する変数を決定するため，予備実験を行い，問題の所在を実験的により明確にした。第Ⅲ章では大きく分けて3つの実験を行い，運動構造のアモーダル完結という現象の理解を深めた。第Ⅳ章では，前章の実験結果から生じた疑問を解決するために，補足実験を行った。第Ⅴ章では，実験全般について考察を行い，続く第Ⅵ章では，この現象の検討を通じて，われわれの知覚について何をいい得るのか，総合的考察を行った。なお，最終章である第Ⅶ章には引用文献をまとめ，さらに，本論文で重要な位置を占める現象については，用語集を本文とは独立してまとめた。

本論文で扱うアモーダル完結や因果知覚と称される現象は，われわれの日常生活の中に偏在しているものである。たとえば，机の上に本が置いてあると，机はその一部を本によって隠されており，そこの部分は直接見られない。しかし，われわれは，机に空虚な穴が空いているとは感じない。本の下にも，机は，続いて存在していると見られる。このように，ある対象が別の対象によって一部を隠されながらも，全体像が知覚される現象をアモーダル完結という。その場合，一部が隠されて見える対象のその隠されているとされる部分は，直接見ることができない。これが，「アモーダル」と称される由縁である。また，完結という現象には，複数対象の層化あるいは重なり合いが見られるのも特徴である。一方因果知覚とは，複数の事象間の関係，特に原因と結果の関係を捉えることで，これは，過去経験等の介在なしに成立する直接知覚であると考えられている。つまり，アモーダル完結も因果知覚も，純粋に知覚的な現象であり，知覚心理学こそが扱う現象の類のものなのである。

ところでアモーダル完結は，静止事態にのみ見られる現象ではない。一部を隠されながらも単一対象の連続運動が知覚される現象は，トンネル効果と呼ばれる。しか

し，運動構造のアモーダル完結としては，この他にも，複数対象の運動によるものがありうる。たとえば，複数対象間に見られる関係の知覚は，アモーダルな事態でも成立することが，従来の研究は示唆している。本研究では，これを実験的に確認し，さらに，知覚とは何かという問いへの答えに貢献すべく，当該現象の検討が図られる。

実験事態は，黒い正方形が直線運動するその軌道上に静止長方形を配置したものである。このような事態では，単一対象の運動（トンネル効果），玉突き，介在物のある玉突き（道具効果），運動開始の誘発（リレーあるいはトリガー効果），逃避，あいまいな印象，2対象の無関係な運動の継起が，運動構造としてアモーダルに知覚されることがわかった。知覚印象を左右する要因としては，静止対象の幅，対象が隠される時間間隔，対象の運動速度が効いた。そして，覆いに知覚される静止長方形通過前後の運動を空間的時間的に隔てるように，これらの要因を変化させると，知覚印象は，トンネル効果，因果知覚，2対象の運動の継起，と系統的に変化する。しかし，無関係な2対象の運動の継起を知覚させるには，小さな遮蔽物で隠される時間を大きくするしか方法がなく，たいていは，トンネル効果か対象間の因果関係の知覚が優位に生じた。また因果印象は，運動対象の速度関係により，玉突きのような機械的なものとなるか，逃避のように対象の意図が感じられるものとなるかが決まった。

そして，覆いの背後にアモーダルに知覚される対象の運動軌道については，i) 玉突きのものは他印象よりも長くなる，ii) 遮蔽物の幅が大きくなると長くなる（特に隠されている時間が長いとき），iii) 第一対象の方が速く動くときは，第一対象の方がアモーダル軌道は長くなる，ことが示された。

本研究により示された因果知覚から，運動構造のアモーダル完結では，静止事態とは異なり，「可視部分」からの示唆を超えた完結の形態が生じる事がわかった。たとえば，トンネル効果や2対象の単なる運動の継起は，「隠されていない」対象の運動から自然に導かれ得る。しかし，玉突きや逃避のような対象間に生じる関係の知覚は，対象の物理的存在だけからは示唆され得ない。

このアモーダルな因果知覚は，統合と分離の知覚的妥協を示すと考えられる。遮蔽物通過前後の運動で，完全な統合が成立すれば，トンネル効果が知覚される。これに対し，2対象の運動の継起が見られる場合は，完全なる分離である。因果関係が知覚される場合は，第一対象の運動と第二対象の運動が，ある一つの大きな構造の構成要素となっている。つまり，部分を主張しながらも一つの全体を作り上げているのである。本研究からは，この全体知覚の固執性が示されると同時に，「隠す」という知覚の空間的時間的限界も示唆された。

また，アモーダル完結では，運動事態であっても静止事態であっても，複数対象の遮蔽が知覚される。そして静止事態においては，この遮蔽知覚の成立が図地分化の点から説明される。しかし運動事態では，この解釈はうまくいかない。というのは，より分化した構造をもち，迫力をもって意識の中心となるのは，空間的輪郭を失って覆いの背後に隠れる対象の運動，あるいは対象間の関係の方である。つまり，輪郭所持や奥行き的位置という図の代表的性格をもたないものが，最も図的に見られている。これに対し，空間的に手前に来る「覆い」は，隠された構造を生み出す地的はたらきを示す。

以上のように本論文からは，運動構造のアモーダル完結を通じ，ゲシュタルトを構成する部分の役割，その階層的内部構造の在り方が明確に示された。

論文審査の要旨

桐谷佳恵君提出の学位請求論文「アモーダル完結についての実験現象学的検討——因果関係の知覚を通じて——」は，実験現象学の立場に立つ知覚理論にとって，いわばその核の一つともなっているアモーダル完結 (amodal completion) および因果関係の知覚 (phenomenal causality) を同時にとりあげた独創的研究である。これらの現象は，我々の知覚は物理的世界の単なるコピーではなく，知覚者が，物理的刺激構成を超えて，どのように秩序ある知覚世界に体制化するかを示す重要且つ説得性をもつ現象である。アモーダル完結においては，対応する物理的刺激が存在せず，したがって感覚様相が欠けていても，何もない「無」として捉えられるのではなく，その周囲が一定の形態条件を充たしていれば，ある形や動きが「存在する」という直接的，直観的知覚印象をもたらすのである。日常世界ではある対象が他の対象により部分的に遮蔽されていても，多くの場合，当該対象は部分的に欠けることなく全体像が知覚される現象である。

このアモーダル完結に関連する現象についてのこれまでの実験的研究は，その規定条件として，形態配置および明るさ・色の勾配または分配など，その大部分は静止事態で行われ，運動事態での研究は極めて稀である。また，本研究で取り上げられた「因果関係の知覚」は，例

えばビリヤードにおいて複数の球の動きが物理的に因果関係をもつが，同時に，その因果関係は，直接的に知覚されるものでもある。同様なことはかかる運動現象に限らず日常事象としてしばしば観察されるものである。この「因果の知覚」はベルギーの Michotte, A. によってはじめて系統的研究が「モーダルな条件」下でなされたものであるが，本研究ではこのような「因果関係の知覚」という運動事態あるいは事象知覚が「アモーダルな条件」においてどのように知覚されるかを組織的な条件分析を行ったという点で，新しい知見を提供するものである。

本研究では，この運動事態での「アモーダル因果知覚」の性質や生起条件を明らかにし，従来の Michotte らの行った「モーダルな因果知覚」との関係を論じ，実験現象学の観点から考察がなされている。

論文は，以下の如く全六章から構成されている。

1章　序

アモーダル完結：A) 静止事態のアモーダル完結について　B) 運動事態のアモーダル完結について　C) 上記以外のアモーダル完結

アモーダル完結の理論的重要性

因果知覚

2章　予備実験：実験 1, 2, 3, 4, 全体的考察

3章　本実験：実験 1A, 1B, 2, 3A, 3B

4章　補足実験 1, 2, 3

5章　実験全体についての考察

6章　結び

1章では，静止事態におけるアモーダル完結，運動事態におけるアモーダル完結，因果知覚についてのこれまでの重要な関連研究を殆ど網羅的にとりあげたレビューであるが，単なる過去の研究の羅列ではなく，これらを現象的および理論的乃至はアプローチの相違を基礎として系統的に分類し，それぞれの特徴と問題点を適切に指摘している。さらに，代表的実験現象学者ともいえる Kanizsa, G. と Michotte, A. の立場を詳細に論述し，前者の一次過程（見ること）と二次過程（考えること）の区分，後者の知覚における「永続的存在性 (perceptual permanence) と「非永続的存在性」の分類を参照しつつ，知覚の本質を浮き彫りにすると共に知覚世界を解くための実験現象学的アプローチの必要性を適切に説いている。そして，上述の点をより一層明瞭に検証するために運動構造のアモーダル完結の一形式である「アモーダル因果知覚」を本論文で取り上げた理由が述べられている。

2章では予備実験として何が当該現象の生起に関わる変数であるのかを明確にするため，4つの実験を行っている。観察事態としては，コンピュータディスプレイ上を黒い小さな正方形が水平方向に移動し，その運動の一部が静止長方形に遮られるというものであり，この事態は「可視運動フェーズ X1＋不可視フェーズ Y＋可視運動フェーズ X2」というように記述される。因果知覚についての先行研究から実験変数として，a) 運動の速度，b) 対象の消失から再出現までの時間間隔 (entry–exit interval: EEI), c) 遮蔽物として知覚される対象の幅，d) 運動対象の可視軌道の長さ，e) 運動軌道の属性などが挙げられるが，実験結果に基づきこれら規定要因を整理し，この現象が安定して知覚されるか否かを確認することにより本実験で操作すべき変数を決定している。

3章の本実験では，予備実験から得られた結果をもとに5つの実験を行っている。

実験 1A では，運動事態のアモーダル完結として，どのような知覚印象が成立するのかを調べるため，対象の運動速度，静止遮蔽物としての長方形の幅，運動対象が隠されている時間間隔 (EEI) の3要因を変化させて，知覚印象の推移を吟味している。実験条件としては，対象の運動速度と運動軌道の長さが，X1 においての方が X2 より大なる条件で観察がなされている。結果として，上記3要因の変化に伴い，知覚印象は，「単一対象の運動，二対象間の玉突き，X1 と X2 の間に介在物があるかのように知覚される玉突き，不明瞭な関係，無関係な二対象の運動」と，系統的に変化することが明らかにされた。

次に実験 1B では，実験 1A の速度関係を逆転させ (X1＜X2)，同じ3要因を変化させた実験を行った。知覚印象は，条件変化に伴い，やはり系統的に変化したが，実験 1A で見られたような機械的な因果関係ではなく，第2対象 (X2) が独自に走りだすという一つのきっかけを第1対象 (X1) が与えるリレー効果や，逃避印象のような，対象自身の能動的・情動的反応ともいえる現象が知覚された。

実験2では，アモーダル玉突きとアモーダル逃避効果を取り上げ，それらの最適知覚条件を求める試みがなされている。本実験では同一被験者に実験1で吟味した3要因全ての条件下で観察を行わせている。その結果，アモーダルな玉突き運動は，実験 1A で示唆された最適条件が確認された。一方，アモーダル逃避効果に関しては，第2対象が第1対象に追われて逃げていくかの如き印象にも幾つかの異なる種類があることを見出している。

実験 3A では，実験 1A と同様の条件下で，運動対象

が遮蔽物の下でどのように動いて見えるのかを検討している。アモーダル玉突きの場合は，二対象の衝突はトンネルの出口附近で生じることが明らかにされた。介在物のある玉突きでは，遮蔽物背後に知覚される介在物はとても大きなもので，第1対象はすぐにそれにぶつかり，第2対象は出口のすぐそばにもともと隠れていると見られていたことが多くの被験者の報告から示された。

実験3Bでは，実験1B同様の条件下で，運動対象のアモーダル軌道の長さの変化について検討している。実験3Aと3Bの結果を総合すると，運動対象のアモーダル軌道の長さを左右する可能性のある要因としては，1) 遮蔽物の幅，2) 因果印象の明瞭さ，3) 入って行く運動であるか，出て来る運動であるか，4) 運動速度，5) 対象の自発的運動の有無，が考えられるとする。しかし，これらの要因の組み合わせによっては，今回の結果と矛盾する結果の生じる可能性もあるので，4章の補足実験で確認することにした。

補足実験では，1つの運動対象が遮蔽物の背後に入って行く，あるいは，遮蔽物の背後から1つの運動対象が出て来る，という観察事態で，1) 入って行く運動か出ていく運動か，2) 運動速度，3) 遮蔽物の幅，4) 隠されている時間，等々の条件を幾つか組み合わせて，特にアモーダル対象の現象的運動軌道の長さ，アモーダル逃避印象を主として再吟味したが，基本的には本実験の結果を確認する結果が得られた。更に，以下の点が新たに明らかとなった。1) アモーダルに隠されている対象の運動軌道が長く知覚される条件は，隠されていく運動（後続永続的存在性），遮蔽物の幅が広い場合，隠されている時間が長い場合などである。2) アモーダル逃避運動に関しては，速度の相違による制約が少ないこと，また，3) 速度がX1＜X2の事態では速度差が大きくなっても単一対象として知覚されやすいこと，等が示された。

5章において，全実験を通しての考察がなされている。アモーダルな玉突き効果は，Michotteらが研究した覆いのないモーダルな玉突きと比べると，衝突感がソフトで，運動速度差が大きくなければ明瞭な印象は得られない。間に介在物のある印象をもたらす玉突き効果は，Michotteらのモーダルな因果知覚についての研究成果と比較すると，これは道具効果に類したものと思われる。この介在物のある玉突き効果では，道具に対応する介在物がアモーダルな存在であり，この介在物には全くモーダルな部分が存在していない。通常，何かがアモーダルに知覚される場合，それには必ずモーダルな部分が存在し，それらすべてが一体となって知覚される。しかし，介在物のある玉突き効果では，モーダルな部分は全く存在しないにもかかわらず，2つの運動対象の動きのみから，そこに介在物の存在が知覚される。なお，アモーダルな玉突きと介在物のある玉突き効果は，Michotteらが研究した接触を伴わない玉突き効果と比較した結果，別のものであることも確認された。さらに，アモーダル逃避印象の実験結果とKanizsaらのモーダルな場合のそれの研究から，対象自身の意図的反応の印象は，モーダルであってもアモーダルであっても，機械的な因果印象のようには，生起条件を明確に特定することは難しいことが示された。

ところで，トンネル効果と称される単一対象の運動の知覚は，遮蔽前後の2つの可視フェーズの条件にかなり違いが出ても，高い頻度で知覚される傾向があった。遮蔽物として知覚される静止長方形の存在に，両フェーズ間の運動を統合する働きがあるようである。

アモーダルな運動軌道の長さの測定からは，知覚的な永続的存在性の限界の問題が明かとなった。つまり，「隠されてゆく」という後続永続的存在性と，「出て来る」という先行永続的存在性とは質的に異なるものであること，また，隠されている存在は，隠している状況によって，その在り方が左右されることが改めて明確になった。

最終章の第6章では，結論として，1) アモーダルに知覚されるかたち，2) アモーダル完結が見られる条件，3) 動くものの体制化―「図」の知覚，4) 運動構造における部分と全体，について以下のごとく議論が展開されている。

1) あるものが，その一部を他のものに隠されながらも，全体が知覚される現象としてのアモーダル完結は，従来主として研究されてきた静止事態のものと，本研究で検討した動的事態のものとでは，特に「隠されて見えるかたち」が，異なった様相を示すことが明かとなった。まず，前者においては，覆いの役割を果たす領域と一部を覆う領域のうちの可視部分から，その隠されている部分が暗にある「もの」の存在が知覚される。逆にいうと，それらの領域から生みだされる存在以外のものは，隠された部分として，知覚的には実現されにくい。これに対し，運動構造のアモーダル完結では，覆いの役割を果たす領域や覆われて見えるかたちの可視部分から暗に知覚されるというより，それを超えた完結化が実現されることがある。その一つが，まさしく運動対象間の因果印象の知覚である。このアモーダルな因果知覚は，対象の同一性や運動の連続性が崩れつつも，依然として一つのま

とまりとして知覚されるものを有することから，知覚的統合と分離の間の折衷的構造であるといえる。本研究から，われわれの知覚には，分離した相互に無関係な事象の継起を独立且つ異なる部分として知覚することはなく，たとえ完全な統合がなされなくても，1つの構造としてのまとまりのあるものとして知覚しようとする体制化の力が働くことが示された。

2) 1章で明らかにした如く，静止事態についての研究では，どのような条件でアモーダル完結が生じるかについて十分な答えが得られなかった。そこで，運動事態でのアモーダル完結の場合を参考にし，静止事態のアモーダル完結の成立は図—地分化から説明され得るという考えを提示した。

3) 本研究で扱った運動事態では，いずれの領域が図となり地となるかは，従来の概念からは十分な説明ができない。静止長方形が奥行として手前に知覚され，輪郭を有して覆いとなった場合，従来の図—地分化の考え方に従えば，覆いである静止長方形はより図的であるといえる。そして，覆われた構造をアモーダルに展開するものは，より地的性質をもつということになる。

運動構造のアモーダル完結の場合，単なる対象の運動だけでなく，対象同士の関係といった事象構造が，アモーダルに知覚されるのである。遮蔽物とこれらの事象とでは，知覚的により重要な部分は，むしろ後者の方であろう。というのも，覆いはその存在が一見無視され，直接は見えない構造の方に，観察者の注意が向けられるからである。覆われた事象は，「輪郭を持って，手前に見られる」という図の最も代表的な性質は備えていないとはいえ，「知覚的に，より分化した構造をもち」，「印象的であって，意識の中心になりやすい」。したがって，それは主図である。このように覆いの背後にあっても，実在性を備えたものが最も図として機能し，その周囲のものは図を支える地，副図となり，全体のゲシュタルトを作り上げるといえよう。

4) 運動構造のアモーダル完結の研究からは，上述のように，動的事態の体制化の問題が検討され得る。このような場合，ゲシュタルトを構成する各部分は，地，副図，主図という階層構造をなすが，これらは物理的に切り取られ得る要素と同一ではない。物理的要素として記述できるものは，そこに実現される知覚構造の在り方により，異なった現れ方をする。本研究は，動的ゲシュタルトにおける部分機能の働きを具体的に示し，部分の自律性の問題を論ずることを可能とした。

5) 最後に，実験現象学のこれからの在り方として，理論を具現化するための実験研究の意義を主張している。特に，論は実験等がもつ意味に及んでいる。社会心理学者杉万俊夫氏の考えを引用して，「実験のもつ意味とは，理論の vivification，すなわち，理論に表現力を与えることである。データは，理論を支持したり棄却するものではない。データとは，抽象的な言説形式をとる理論に，具象的な解釈を与えるものである。つまり，理論とは，客観的外在的事実の反映ではなく，研究者にとっての価値が必然的に反映されるものである」。同様な論理は，知覚研究のような実験心理学にも当てはまるのではないだろうか。特に，実験現象学的アプローチをとる研究にとっては，この“理論の具現化”の為のデータの存在意義というのは重要であろう。本研究も，この理論の具現化に一役買うデータを提供したものであると結んでいる。

以上，論文の要約を述べたが，本論文内容に対して特に評価すべき点を挙げるならば，

1) アモーダル完結は，知覚研究の方法論にとって重要な手がかりを与える。この現象は形態の部分の変化で多様に変化することから，局所的な刺激と知覚との対応を見ようとする心理物理学的方法の限界を示す。また，その部分に刺激が存在しないことが知られていても，そこに形や動きが知覚されることから，経験的方法論の限界をも示すものである。したがって，現象面での部分と全体の関係を明らかにし，現象世界の知覚法則乃至は原理を求める実験現象学的アプローチによってはじめてこの現象の成立過程を理解できるとする，著者の主張はまことに当を得たものである。

2) 頭書で述べた如く，アモーダル完結または層化(visual stratification)の現象は日常世界で誰もが当然のこととして経験している現象にも拘わらず，Michotte, A. さらに Kanizsa, G. が注目し，説得力のある独創的研究を行うまで等閑視されていた。しかし，彼等を含めたその後の研究の殆どは静的事態においてのものであり，環境世界の中を絶えず動き回る生活体の経験の多くが示す動的事態での研究は極めて少ない。この点に着眼して，組織的な実験を通して条件分析を行った本研究は日常の事象知覚の理解に対しても新しい知見をもたらし，今後の研究に大きく寄与するものと確信できる。

3) 著者は，上記の静的事態に於けるアモーダル完結と動的事態でのそれを分けて，それぞれの特徴を整理し，アモーダル完結の理論的重要性を実験現象学的立場から詳細な検討をなしている。この理論的考察は高い水準を保持するものと見なすことが出来る。

4) 本論文において，運動構造のアモーダル完結の一形式であるアモーダル因果知覚を扱い，この現象の基本的な現われ方を規定する空間的・時間的要因を実験により明らかにしようとしたことは，動的事態でのアモーダル完結を吟味する為の適切な手段であり，この点に注目したことを評価したい。

なお，形態視におけるモーダル完結とアモーダル完結との関係，図の知覚と地の知覚との機能的関係，さらに因果の知覚における Michotte が述べている意図・情動についての点など，なお吟味さるべき点が幾つか残されているが，上述のように，本論文は重要でありながらこれまで十分な分析が行われなかった現象に積極的且つ意欲的に取り組み，実験現象学の立場から新しい知見を提供したことは，著者の力量と将来性を十分に示すものである。よって，本論文は博士（心理学）の学位を授与されるに値するものと判定される。

社会学博士（平成 11 年 3 月 23 日）

甲　第 1697 号　伊東　秀章

未婚化に関する社会心理学的研究：計画行動理論に基づく分析

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授・大学院社会学研究科委員　Ph. D.　岩男寿美子

副査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員　文学博士　三井　宏隆

副査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員　教育学修士　渡辺　秀樹

副査　東京国際大学教養学部教授・大学院社会学研究科委員　東京大学名誉教授　社会学修士　鈴木　裕久

内容の要旨

本研究は，社会心理学の中で主要な位置を占めている「態度―行動研究」の枠組み，およびその態度―行動の関連を扱った理論の中でも最も影響力が強いとされている「計画行動理論」(theory of planned behavior; Ajzen & Madden, 1986) を用い，近年わが国において進行し，また少子化や高齢化との関連も含めて社会的重要性が非常に大きいと思われる「未婚化」現象を社会心理学的に検討することを目的として行われたものである。

本論文は，未婚化の現状，未婚化の社会的影響，未婚化に影響する諸要因，社会心理学における結婚研究の先行知見，態度―行動研究，計画行動理論について考察を行った理論的検討から成る 6 つの章と，未婚者および既婚者を対象として 5 つの調査を行った実証的検討から成る 5 つの章，さらに，理論的検討と実証的検討の結果を併せて考察を行った「結論」を含めた 12 の章から構成されており，未婚化についての社会心理学的知見を明らかにするとともに，態度―行動の関連および計画行動理論についての新たな知見も提出している。

第 1 章では，本論文全体の「研究の目的および意義」が述べられる。わが国においては結婚や家族をめぐる状況の変化が著しく，また，それに伴って結婚をめぐる議論の内容も変化している。そうした状況において，未婚化を社会心理学的な立場から検討することは (1)「社会的関連性」(social relevance; Hartmann, 1977 など）および (2)「学問的重要性」（鈴木，1995 など）の点で意義が大きいと考えられるが，未婚化についての社会心理学的な研究はわが国では乏しいというのが現状である。そこで，本論文全体における研究目的を次のように具体的に設定し，本論文では社会心理学的な立場から未婚化についての検討を進めていくことにする。第 1 の目的は，理論的な検討として，「なぜ，未婚化が進行しているのか」という大きな問題のもと，社会学的，経済学的，人口学的，心理学的な先行研究について幅広いレビューを行うことである。現在までのところ，未婚化については社会学的，人口学的な研究が大半を占めており，未婚化の検討を行うためには，社会心理学分野以外の知見も参考にすることが必須であると思われるからである。また，同時に，未婚化の現状や未婚化が社会的に与える影響についても概観することで，未婚化という現象を多様な観点から俯瞰し，社会心理学的な問題設定を明確にすることが可能になると考えられる。結婚や家庭，ジェンダーの問題については，研究者の「暗黙の前提」が問いの立て方や研究方法，結果の解釈などと交絡しやすいといわれており，まずはこれまでの知見の整理・統合を行うことが研究を進める上で必要になるであろう。第 2 の研究目的は，未婚化を社会心理学の主たる研究枠組みの一つである「態度―行動研究」の枠組みにのせて検討す